

【2009年度基本方針】

昨年度はCODEのこれまでの活動が高く評価され、第15回読売国際協力賞というすばらしい賞を受け、あらためて阪神・淡路大震災の被災地から託されたミッションの重みを感じさせていただきました。

さて昨年はミャンマーサイクロン「ナルギス」や中国・四川省地震という大規模災害が相次いで発生し、自然災害の非情さを思い知らされた1年でありました。そうした厳しいなかで、懸命な救援活動が繰り返され、さまざまな“支えあい”が積み重ねられてきました。私たちは多彩な支えあいから、再び多くのことも学びました。その一つは、国と国が十分につながらなくても、人と人がつながることができるということです。一方、1990年代に入って滲み出してきた世界経済の落ち込み傾向が、一気に金融経済の破綻につながり、それによる深刻な失業問題を引き起こすという経済危機が襲ってきました。世界を襲うこの経済危機はこれまでには経験してこなかった“災害”ともいえるのではないのでしょうか。2009年に入り、経済社会のあり方そのものを問い直す議論まで急速に広がり、重大な事態になっています。こうなったのも、これでもかこれでもかとモノを中心に追いかけてきた私たちに対するツケが廻ってきたのかもしれませんが。14年前、すでに私たちは「ライフスタイルの見直し」を提案していました。それは新しい市民社会を創る力を養おうというメッセージの根幹部分でもあったからです。長い道のりですが、私たちは確実にあの時の「宣言」(第1回市民とNGOの「防災」国際フォーラム)を育てています。

ところで、2009年のニューイヤーとともに、世界中の期待を背負ってバラク・オバマが「チェンジ」という言葉を掲げて、アメリカの新大統領として彗星のごとく登場して来ました。いろいろな国際社会に山積する諸問題を解決するべくリーダーシップを発揮されることが望まれています。ことアフガニスタンに関しての政策には間接的な当事者として首を傾げたくなるようなところがあります。CODEはアフガニスタンに関しては、2001年の「9・11」以来、主にアフガニスタンの農家が主体となる草の根の活動として、ぶどう畑再生プロジェクトを支援しています。長年の紛争による疲弊から自立の道筋を見いだせるように、「銃の代わりに鍬を持って平和を築く」という取り組みが順調に動き出した矢先だけに、イラクから削減した米兵をアフガニスタンへ増派するというバラク・オバマ新大統領が打ち出した政策には、納得のいかないものがあります。決して、武力を持って平和を築くことはできない。いわゆる「目には目を！」で対処すれば、むしろ憎しみの連鎖を拡大するだけだと言わざるを得ないからです。

ところで2010年愛知県で「生物多様性条約第10回目締約国会議」(COP10)が行われます。この「生物」「多様性」という2文字も、阪神・淡路大震災のあと、とても大切なキーワードとしてこれまで育んできました。同会議でその辺りはどの程度触れられるのか気になります。いよいよ本気で「いのち」と向き合わなければ、人類の未来はないような気がします。12000年前から北米大陸にネイティブ・アメリカンとして今も生存し続けているイロコイ族は、7代の子孫のことまで考えて「いま」を生きてきたといいます。私たちが阪神・淡路大震災から大事にしてきた「いま」という言葉にも、共通するものを持っているような気がします。だから、「いま」を生きる私たちは何事に対しても無関心であってはいけないのだろうと痛感します。

CODEはこの14年間、一貫して「最後の一人までを救う」と言い続けてきました。それは目の前で困っている人がいれば、とりあえず「寄り添い」「支える」ということを繰り返すことによって到達するものだと思ってきました。しかし、何度も災害に遭遇することによって、私たちは少しずつ賢く、強くなりました。「支える」という一方通行の行為は存在せず、相互互惠の関係性の上で「支えあい」ということの到達点が最後の一人をも救うことになりうるだろうということにも気づいてきました。私たちは絆を鎖のようにつなぎながら「支えあいの連鎖」を創り続けてきました。これからも、どれだけ遠くにいても「痛みの共有」を忘れず、同時に可能な限り身近なところでの「支えあい」の実践を積み重ねたいと思います。

海外災害（地）への救援活動事業】

| | | | | | | | | | | | | | |
|----------------|--|----|------|---------|------------|------------|------|----------|----------|------------|----------|-------|------|
| 事業名（新規） | イタリア中部地震 | | | | | | | | | | | | |
| 実施日時 | 2009年4月7日から（地震発生は同年4月6日） | | | | | | | | | | | | |
| 実施場所 | イタリア・首都ローマから約100km離れた震源地ラクイラ（人口7万人） | | | | | | | | | | | | |
| 受益対象者の範囲及び予定人数 | 死者 294人以上、負傷者1500人、倒壊家屋 15000棟 | | | | | | | | | | | | |
| 実施内容 | <p>4月7日から、関係団体に募金活動と呼びかけると共に、現地に滞在している関係者からの情報収集を中心に被災状況の把握に務め、4月22日（水）から5月30日の日程でJALの協力を得て、尾澤良平を現地派遣する。今後の支援内容については、尾澤の報告を受けて、理事会での協議を経て、決定して行く。</p> <p><被災地に関する情報></p> <table border="1"> <tr> <td>死者</td> <td>294人</td> </tr> <tr> <td>被災した建造物</td> <td>1万～1万5000棟</td> </tr> <tr> <td>自宅に帰れない被災者</td> <td>約4万人</td> </tr> <tr> <td>仮設テント入居者</td> <td>約2万4000人</td> </tr> <tr> <td>ホテル・個人宅避難者</td> <td>約1万5000人</td> </tr> <tr> <td>キャンプ地</td> <td>31カ所</td> </tr> </table> <p style="text-align: right;">（4月14日現在）</p> <p>首都ローマから、わずか100kmほど離れたところに位置する静かな古都ラクイラを襲った今回の地震。石造りの歴史的な建造物が被害を受けていることから、被害の顔として日本で云えば能登半島地震とよく似ているかも知れない。この地の住民が誇りを持って古都を守ってきただろうが、一部近代化の波を止めることができず、耐震基準をおろそかにしてきた建物が多く壊れた。2007年にイタリアの国立樹木・木材研究所と日本の独立行政法人防災科学技術研究所が共同で木造7階建ての実物大加震実験をしていたことを確認したが、その時に木造が壊れなかったということで日本でも話題になったが、被災地においても「イタリアの設計で壊れなかったんだよね！」と話題になった。そう言う意味では再建の過程で耐震補強という知恵と技術がどれほど加味されるか期待される場所である。一方現地入りした尾澤は、出発前にドクタークラウン（臨床道化師治療）に関する情報も収集し、本人の関心も併せてテント村などで和風ピエロを演じさせて貰い、子どもたちに大受けをした。この日本で言うドクタークラウンの有資格は厳しい研修の上で降りるものだが、今後災害後の心のケアに関連して注目すべき分野ではないかと期待できる。他に、協同組合関係やイタリアDPI（障害者インターナショナル）などともコンタクトしてきたので今後の支援活動の参考に行きたい。ただイタリア地震支援については、地震発生直後に首相が海外からの支援を断ったことと、イタリアという国が途上国でもないのに、マスコミの関心は薄れ、実質支援金がほとんど集まらない状況なので、大規模な支援プロジェクトを行うことは難しい。しかし、日本での特に阪神・淡路大震災や能登半島地震の経験から知恵の提供だけでも届くような道筋は追求したい。</p> <p>（以下地震発生からの活動）</p> <ul style="list-style-type: none"> * 4月6日 インターネットによる情報収集開始 * 4月7日 午後12時プレス発表（毎日新聞、神戸新聞、読売新聞、朝日新聞） * 4月9日 午後12時55分 サンテレビニュースで放送 * 4月13日 MLにてニュース第2報流す。 | 死者 | 294人 | 被災した建造物 | 1万～1万5000棟 | 自宅に帰れない被災者 | 約4万人 | 仮設テント入居者 | 約2万4000人 | ホテル・個人宅避難者 | 約1万5000人 | キャンプ地 | 31カ所 |
| 死者 | 294人 | | | | | | | | | | | | |
| 被災した建造物 | 1万～1万5000棟 | | | | | | | | | | | | |
| 自宅に帰れない被災者 | 約4万人 | | | | | | | | | | | | |
| 仮設テント入居者 | 約2万4000人 | | | | | | | | | | | | |
| ホテル・個人宅避難者 | 約1万5000人 | | | | | | | | | | | | |
| キャンプ地 | 31カ所 | | | | | | | | | | | | |

| | |
|--|---|
| | <ul style="list-style-type: none"> * 4月14日 神戸市外国語大学学生3名が街頭募金活動を行い、その募金を事務所に届けてくれた。この模様が、同日NHKで放送される。 * 4月22日～5月1日 JALの協力を得てスタッフを現地派遣する。 * 5月6日 イタリア地震現地報告会（CODE会議室） * 6月12日 イタリア中部地震被災者支援のためのチャリティ・コンサートが、CODEの協力のもと開かれる。売上金はCODEに寄付される。 * 5月15日現在 寄付状況：24件 117,950円 |
|--|---|

| | |
|----------------|---|
| 事業名（継続） | 中国・四川大地震救援プロジェクト |
| 実施日時 | 2008年5月13日から（地震発生は5月12日） |
| 実施場所 | 地震被災地域 |
| 受益対象者の範囲及び予定人数 | 北川県香泉郷の人口7800人 |
| 実施内容 | <p>丁度個人的に雲南省に滞在していた吉椿雅道が、同地震発生後3日目に被災地成都に入り、避難所や不自由なテント生活をしている被災者に寄り添いつつ、毎日100キロを超える被災地を調査し続けてきた。主な支援対象の地を最終的に北川県香泉郷光明村とし、毎日同村に入りガレキの片付けなどを被災者ともに行うことで絶大なる信頼を得ることができた。2009年度4月度理事会で同村でのCODEが行う支援事業が正式決定した。香泉郷の7つの村に診療所を含む「総合活動センター」を建設するという内容である。同センターには、診療所の他に村内放送室、文化活動室、村民委員会、会議室などいろいろな機能を備えることになっている。当然コミュニティ再建の拠点ともなるので村民の主体的な管理・運営に期待したい。中国の場合は、一般的に地域医療とは言わないが、むしろ日本で定着しつつある地域医療の経験事例なども情報交換することで、中国の地域医療推進に役立てたい。同時に周辺の村や隣県の被災地などで活動している現地の活動者ともこれまで同様情報交換を密にし、復興途上における成功事例を同村にも生かしたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> * 4月26日 岸和田土生神社にて中国四川大地震報告会 * 4月29日 UNCRD・CODEの共同による中国四川大地震合同報告会 * 5月10日 第六次派遣として、吉椿雅道を中国四川に派遣。 |

| | |
|----------------|--|
| 事業名（継続） | 「ジャワ島中部地震救援ウォータープロジェクト」 （通称：通称“呼び水プロジェクト”） |
| 実施日時 | 随時（2006年5月27日から）同プロジェクトは2008年4月1日から継続） |
| 実施場所 | インドネシア・中部ジャワ Yogyakarta 省 Gunung Kidul 地区 Giri Sakar 村 （Giri Sakar 村の住宅被害は全半壊6軒） |
| 受益対象者の範囲及び予定人数 | Giri Sakar 村住民 30 世帯 132 名およびその周辺の R T |
| 実施内容 | <p>2006年のジャワ地震後に CODE の支援プロジェクトとして行ったゴトンロヨンによる住宅再建は同年10月に終了した。その後この住宅再建のパートナーとして現地ドゥタ・ワカナ・キリスト大学エコ・プラワット教授の仲介により、同じジャワ地震被災地のグヌンキドゥル地区ギリサカル村の水問題に関する支援の提案があり（2007年）、2008年3月ウォータープロジェクトとして支援を決定、2008年11月度理事会において、“呼び水プロジェクト”として持続可能な水の確保を目指して、現地での活動が始まる。アフガニスタン支援プロジェクトに続いて、CODEはこの地においてこれまでの復興支援から持続可能な暮らし支援プロジェクトへの移行に挑む。CODEの支援によって、ウォータープロジェクトの第一段階として本管から支管を敷設し、一度その水を貯水タンクに貯め、同村はじめ周辺の村に有料で給水活動を行っている。一方これまでも乾季に水が枯渇していた現状を解消するために、雨期の雨水を貯蓄する雨水タンクを造り、通年としての水の確保に務めてきた。しかし、それでも乾季を通して賄えるだけの水が確保出来ないため、他の方法も模索を始めた。最初の CODE の支援で弾みがついた同村は、水販売で得たわずかな資金をプールし、村の若者が中心となってマイクロクレジットシステムを導入し始めた。同システムによって、アヒルの飼育やナマズの養殖、また唐芥子栽培など農業開発にもチャレンジし、自立した村の地域経済の確立に向けて活動を開始した。持続可能な水確保のための他の方法とは、乾燥地農業などの成功事例を参考にしながら、持続可能な本格的な農業に取り組むことによって、永続的に水を確保する方法である。CODEは、こうして被災した村の住民が主体となって、持続可能な水確保を目指す活動を支援しており、これを“呼び水プロジェクト”と命名した。今のところこの“呼び水プロジェクト”に関連して、現地からは支援のための資金援助を提案されていないので、当面は智恵と情報の提供が主な支援となる。なお、2008年9月、CODEとの協働事業としても位置づけられている神戸学院大学「防災・社会貢献ユニット」の浅野壽夫教授のゼミが、同村をフィールド学習の対象地に選び、学生十数人と共に同被災地を訪れ、報告書もつくられた。</p> |

| | |
|----------------|---|
| 事業名（新） | バングラディッシュ・サイクロン「シドル」救援プロジェクト |
| 実施日時 | 2007年11月20日から |
| 実施場所 | 水害被災地域 |
| 受益対象者の範囲及び予定人数 | 孤児院で暮らす子どもは、8才～15才の35人。職員は2人 |
| 実施内容 | サイクロン“シドル”の被害のあった孤児院の補修・再建が決定したので、必要な再建資金を送金すれば工事にかかる。工事中のプロセスで、出来れば斉藤容子さんがバングラ入りするときに同行させて頂き、一度モニターに行くことができればと考えている。 |

| | |
|----------------|--|
| 事業名 | アフガニスタン救援プロジェクト －JICA 草の根技術協力事業（地域提案型）－ |
| 実施日時 | 2002年7月から継続事業、同 JICA 事業は 2007 年から開始の 3 年間事業 |
| 実施場所 | アフガニスタン カブール州ミールパチャコット地域 |
| 受益対象者の範囲及び予定人数 | ミールパチャコット地区ババカシュガルの 4 つの村のぶどう家族 500 所帯とその地域住民（全世帯数 1560 世帯） |
| 実施内容 | CODE のアフガニスタンへの関わりは、2001 年「9.11」以後、アフガニスタン支援を帰属して来た CODE は、その後住民の自立を促す事業として、主に「ぶどう畑再生支援」（通称「ぶどうプロジェクト」）に取り組んできた。アフガニスタンはカルザイ政権の不安定さから慢性的な治安の悪化を招いている。アメリカのオバマ新大統領の登場によって、イラクからの撤退に伴って、アフガニスタンへの兵士の増強を国際社会に約束している。アメリカでも、間違いなくベトナム戦争の二の舞になり、泥沼化するという識者もいるなかで実施するようだ。ちなみに 2009 年は二度目の大統領選挙が行われる。このことをきっかけにますます治安悪化を招く危険性があると言える。2008 年は日本の医療支援 NGO ペシャワール会の日本人スタッフが殺されたことから、日本の外務省は関係 NGO に「遠隔操作」を提案し、まだ現地に滞在していた NGO も随時撤退した。そんな中で CODE は、2003 年より本格的な支援を続けているぶどうプロジェクトをサポートする形で、2007 年より JICA 草の根技術協力事業の決定を頂き、兵庫県佐用郡佐用町と CODE との三者の連携事業として、農業と防災研修を行ってきた。同事業は 3 年間事業で 2009 年は 3 年目となり、同事業は終了する。これからの課題は、同国の治安がどこまで安定回復をするかに大きく影響されるが、これまで 3 年間の JICA 草の根事業をさらに生かすために、今年度中に現地との調整を充分行う必要がある。幸い同研修最終年次ということもあって、2009 年は地元の県知事や協同組合の責任者などを研修生として招聘したので、これからの広がり期待ができる。詳細は、本事業計画関係機関ネットワーク事業を参照。 |

なおアルジェリア地震（2003年5月）およびイラン地震（2003年12月）のその後の支援については、被災地からの情報を収集しつつ、追加支援の提案があればその時点で検討することにする。

スリランカについては周辺国に行く機会があれば一度モニターに行く必要があるだろう。同じくパキスタン地震で支援した女性の生計向上のための職業訓練センターについても、近隣国に行く時にも一度モニターをする予定である。ミャンマーサイクロンのプロジェクトも同様に考えているが、入国の規制が予め予測され、HuMA と同行することが望ましいと考えている。

【人材育成事業】

| | |
|----------------|--|
| 事業名（継続） | NGO ことはじめ |
| 実施日時 | 年間を通じて3~4回 |
| 実施場所 | 当センター会議室もしくは神戸市内の貸し会場 |
| 受益対象者の範囲及び予定人数 | 現在は、新しいスタッフも増えているので CODE スタッフ自身の研修も兼ねて一般公開での開催を試みたい。現役の学生も出入りしているだけに、若い層に訴えたい。CODE 寺子屋として考えたいので、収容人員は最大 20 名である。 |
| 実施内容 | CODE そのものに、学生ボランティアはじめ新しいスタッフを加わっているので、スタッフの内部研修を併せて、公開セミナーとして位置づけ企画、実行する。 |

| | |
|----------------|-------------------|
| 事業名（継続） | HAT 神戸内 国際機関訪問ツアー |
| 実施日時 | 年間を通じて1回程度 |
| 実施場所 | 神戸市内 |
| 受益対象者の範囲及び予定人数 | 大学生など10人 |
| 実施内容 | 今年は、再度企画し、実施したい。 |

| | |
|----------------|-----------------------------------|
| 事業名（継続）」 | スタッフのスキルアップ研修（スタッフは専従・非専従を問わない） |
| 実施日時 | 随時 |
| 実施場所 | 原則国内 |
| 受益対象者の範囲及び予定人数 | 若干名 |
| 実施内容 | 昨年度同様、可能な限りシンポジウムや研修などにスタッフを派遣する。 |

| | |
|----------------|--|
| 事業名（継続） | ボランティアの日 |
| 実施日時 | 隔月1回 |
| 実施場所 | CODE 事務所 |
| 受益対象者の範囲及び予定人数 | CODE と連携するグループえんのボランティアを中心に、大学生および高校生にも呼びかけボランティアの層を厚くしておきたい |

【災害関連情報の収集及び発信事業】

| | |
|----------------|--|
| 事業名 | 災害情報サイト（CODE World Voice）の運営 |
| 実施日時 | 随時（2002年からの継続事業） |
| 実施場所 | SOHO形式や当センターなど |
| 受益対象者の範囲及び予定人数 | 不特定多数の災害情報を得ている人たちすべて。 |
| 実施内容 | 翻訳者は、現状ではSOHOで若干名、事務所に通ってボランティアしてくれる人が若干名という厳しい状況だが、これまで通り可能な限り継続する。主になる翻訳ボランティアが見つからなければ頻度は減少するが、救援レポートと合体するなどして、コツコツと継続する。最近注目度は極端に落ちているが、意義ある活動なので継続できることに努力する。 |

「ネットワーク構築事業」

| | |
|----------------|--|
| 事業名（継続） | （関係機関からの受託事業）神戸学院大学「防災・社会貢献ユニット：社会貢献論Ⅰ」の前期授業企画（14回）および講師派遣 |
| 実施日時 | 4月14日から7月21日まで、毎週火曜日第4限目。（5月5日は休講） |
| 実施場所 | 神戸学院大学ポートアイランドキャンパス |
| 受益対象者の範囲及び予定人数 | 約30人 |
| 実施内容 | <p>（同学院大学学生のシラバスに紹介されている文章）</p> <p>一阪神・淡路大震災から15年を迎え、災害経験の風化が叫ばれつつある。しかしながら、その経験を風化させないことは、今後起こりうる災害に対して、我々がどのようにそれに立ち向かい、被害をより少なくするかの大きな知恵を与えてくれるものである。阪神淡路大震災では、公的機関の支援はもとより、被災地域の人たちや民間のボランティアの人々が新しい社会を築く力であることを知った。この授業は、阪神淡路大震災を契機に神戸の市民を中心に設立した「CODE 海外災害援助市民センター」との提携により実施するものであり、わが国の災害救援ボランティアを中心とした民間レベルでの活動について学ぶことを目的とする。したがって、その内容は、CODE 及び海外で活躍している NGO の活動について実際に活動している方々を招いて、現場の声を聞き、そのコンセプトと活動内容、課題について考察していく。</p> <p>このようにCODEとのコラボレーション事業という位置づけで始まった神戸学院大学社会貢献ユニットへの講師派遣は、2009年度も下記のようなスケジュールと講師陣および内容で行う。</p> <p><内容></p> <p>第1回（4/14） ガイダンス：約30名出席（浅野、村井）</p> <p>第2回（4/21） CODE海外災害援助市民センターが担う社会貢献について（村井）</p> <p>第3回（4/28） 阪神・淡路大震災から15年目の「いま」、被災者は？（牧秀一）</p> <p>第4回（5/12） 地域学～明石の町おこし、地域おこしから学ぶ（松本誠）</p> <p>第5回（5/19） 減災サイクルともう一つの社会（村井）</p> <p>第6回（5/26） 農業と持続可能な社会（本野一郎）</p> <p>第7回（6/2） 災害時における地域力（織田峰彦）</p> <p>第8回（6/9） 前期の振り返り（村井、浅野）</p> <p>第9回（6/16） ジェンダーと災害（齊藤容子）</p> <p>第10回（6/23） 四川大地震から学ぶ（村井、吉椿）</p> <p>第11回（6/30） 能登半島地震から学ぶ（村井）</p> <p>第12回（7/7） インドネシア・ジャワから学ぶ“地域自立の経済”</p> <p>第13回（7/14） 同上の支援事例研究発表より学ぶ（村井、浅野）</p> <p>第14回（7/21） まとめ（浅野、村井）</p> <p>* その他、随時同ユニット主催で毎月第3火曜日夜、同大学チャレンジショップで開催され全・安心社会システム研究会に参加する。</p> <p>* その他同大学に事務局を置く、ポーアイ4大学連携推進センター実施のポーアイ教養科目の講師として「2009 地域コミュニティ入門」の災害と地域を1時間担当する。－6月18日（木）</p> |

| | |
|----------------|---|
| 事業名（継続） | （関係機関からの受託事業）「アフガニスタン・カブール州シャモリ平原における農業開発と地域防災の相互補完促進事業」（JICA 草の根技術協力事業（地域提案型）三年次） |
| 実施日時 | 7月1日から～11日まで |
| 実施場所 | 主に兵庫県佐用町、補助で山梨県牧丘町倉科 |
| 受益対象者の範囲及び予定人数 | アフガニスタンからの研修生7人 |
| 実施内容 | <p>JICA の平成 20 年度草の根技術協力事業（地域提案型）として実施。今年度は3年目で終了年度。昨年同様、アフガニスタンから7名の研修生を招くが、一人は県知事、一人は県の協同組合課長、もう一人は県のシューラ長というメンバーなので、今後の現地における普及に期待できる。今年も前半は山梨県のぶどう農家、澤登農園で、40年前から継続して行っている有機農業によるぶどう栽培を学ぶ予定。</p> <p><研修日程案></p> <p>7月1日 成田着、JICA 東京に宿泊</p> <p>7月2日 山梨県に移動</p> <p>7月3～6日 澤登農園等にてぶどう有機栽培の実習と講義</p> <p>7月7日 兵庫県佐用町へ移動</p> <p>7月8～9日 佐用町農業関連施設見学と交流学习、現地への普及計画</p> <p>7月10日 3年次の振り返り</p> <p>7月11日 関空発</p> |

| | |
|----------------|---|
| 事業名（継続） | 関係団体への正会員加盟やシンポジウムなどの実行委員会あるいは運営委員会への参加 |
| 実施日時 | 随時 |
| 実施場所 | |
| 受益対象者の範囲及び予定人数 | |
| 実施内容 | <ul style="list-style-type: none"> * 関西 NGO 協議会－正会員として加盟、互選により理事となる。 * TELNET ネットに参画する。 * 防災教育ワークショップ・めだかの学校「わたしたちの生きる星」に協力。4月18日 * JICA・兵庫県主催「防災・気候変動適応アジアフォーラム」に参加。4月23、24日 * UNCRD と CODE の共同で「中国四川大地震報告会」を開催する。4月29日 * コープこうべ総代会に出席（芹田代表理事）。6月16日 |

| | |
|----------------|--|
| 事業名（継続） | （関係団体の主催する事業との連携） コープこうべ自然災害救援基金での報告会にスタッフ派遣。 |
| 実施日時 | 最低年1回 |
| 実施場所 | コープこうべ生活文化部 |
| 受益対象者の範囲及び予定人数 | 会員はじめ不特定多数。 |
| 実施内容 | CODEの理事でもあるコープこうべは、中国四川地震以来ハート基金運営委員および全組合員および一般の利用者の積極的な取り組みを踏まえ、5月12日の地震発生1年に合わせ、運営委員有志と本部職員とが被災地訪問を行う。 今年度も、随時報告会が開催される予定で、積極的に報告者を派遣する。 |

| | |
|----------------|--|
| 事業名（継続） | （関係団体の主催する事業との連携）ゆとり生活館 AMIS(1F)のNPO/NGO交流コーナーに参加 |
| 実施日時 | 年数回開催 |
| 実施場所 | 同会館1階 |
| 受益対象者の範囲及び予定人数 | 同会館利用者 |
| 実施内容 | 前年度同様積極的に協力する。 （内容） 年1回の運営委員会、年1回の発表会には参加する。 |

【「市民による災害救援」に関する調査・研究事業】

| | |
|----------------|--|
| 事業名（継続） | CODE 寺子屋において、調査・研究につながる学習会の実施 |
| 実施日時 | 随時 |
| 実施場所 | CODE 事務所 |
| 受益対象者の範囲及び予定人数 | 役員、事務局員、CODE 会員、関係者、一般。 |
| 実施内容 | 2008年度から、これまで個別に掲げていた学習会事業を、「CODE 寺子屋学習会」として一括集約し、それぞれの学習会の成果をもとに、さらに調査・研究が必要となれば理事会でその都度諮る。 |

【「市民による災害救援」に関する啓発及び広報事業】

| | |
|----------------|---------------------------|
| 事業名（継続） | 賛助会員の拡大 |
| 実施日時 | 随時 |
| 実施場所 | 全国各地 |
| 受益対象者の範囲及び予定人数 | 不特定多数 |
| 実施内容 | 拡大目標として、賛助会員 20 名の増員を目指す。 |

| | |
|----------------|--|
| 事業名（継続） | 救援プロジェクト報告会及び講師派遣 |
| 実施日時 | 随時 |
| 実施場所 | 全国各地 |
| 受益対象者の範囲及び予定人数 | 不特定多数 |
| 実施内容 | <p>CODE の主たる事業である救援プロジェクトについての報告会を必要に応じて開催する。（コープこうべ主催の報告会は、ネットワーク・連携事業で紹介）</p> <p>また、関係団体（兵庫県国際協力協会、堺女性センター、関西 NGO 協議会、日本防災士機構、各大学、高等学校など）への講師派遣を行う。テーマは国際協力、災害救援、NGO・ボランティア論など</p> <p><中国四川大地震関連></p> <ul style="list-style-type: none"> * 4月26日 岸和田土生神社にて中国四川大地震報告会（再掲） * 4月29日 UNCRD・CODE の共同による中国四川大地震合同報告会（再掲） * 5月14日 日中友好協会からの招待で、中国四川大地震報告会（東京） * <p><イタリア地震関連></p> <ul style="list-style-type: none"> * イタリア地震支援報告会 5月6日開催 CODE 寺子屋にて（再掲） <p><日本防災士機構への講師派遣の予定></p> <ul style="list-style-type: none"> * 6月14日 奈良会場 * 6月21日 石川県・能登空港会場 <p><確定している講師派遣></p> <ul style="list-style-type: none"> * 龍谷大学 国際 NGO 論 11月18日（水）13:15～16:30 * 関西学院大学 キリスト教と社会 B 12月4日（金）16:50～18:20 . |

| | |
|----------------|---|
| 事業名 | 機関誌及びインターネットによる情報発信 |
| 実施日時 | 機関誌は年4回発行 インターネットは随時 |
| 実施場所 | CODE 事務所 |
| 受益対象者の範囲及び予定人数 | 機関誌は全国各地 700 人/団体 インターネットは不特定多数 |
| 実施内容 | 昨年同様、CODE レターは年4回の発行を目指す。ホームページについては、可能な限り情報を更新し、見やすくかつ見たくなるように工夫する。 また、マスメディアに関する露出度は一時期より減少しているように思われるが、活動をしていて、大事なことは懲りずに発信し続けたい。 |

| | |
|----------------|--|
| 事業名 | 冊子及び書籍等の発行及び支援グッズの販売 |
| 実施日時 | 随時 |
| 実施場所 | CODE 事務所 |
| 受益対象者の範囲及び予定人数 | 不特定多数 |
| 実施内容 | <p>なお「ほっとけない運動」の一環として販売してきた“ホワイトバンド”が若干数残っているが、この支援グッズの中で取り扱い、別立ての項目をたてない。</p> <p>また、昨年度も実行できなかったが下記の2点について手作りタイプで作成し、“CODE ブックレット”のようなイメージを想定しつつ、CODE 寺子屋などでコツコツ販売する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「国際的な人道活動と CODE」 CODE 設立 2 周年記念での芹田代表理事による講演録 ・ 「予防防災」 2005 年度寺子屋防災での室崎副代表理事における講演録 <p>* その他これまでの書籍や支援グッズを販売数する。</p> |

【その他本会の目的達成の為に必要な事業】

| | |
|----------------|--|
| 事業名 | CODE エイド設立のための情報収集および研究 |
| 実施日時 | 随時 |
| 実施場所 | CODE 事務所 |
| 受益対象者の範囲及び予定人数 | 約 5 人 |
| 実施内容 | 本プロジェクトは、発足当初以来検討されているが、CODE を財政的に支えるファンドづくりは難しい。しかしながら阪神・淡路大震災をきっかけに生まれた災害救援 NGO として、期待されているところは大きい。大規模なファンドの一つである「チャリティ・プラットフォーム」はじめ、日本ファンドレイジング協会が発足するなど、市民ファンドに関連する動きは多彩になってきた傾向もあるだけに、「CODE エイド」設立がより現実的となってきた。今年度もう一度議論の場を提案したい。 |

| | |
|----------------|---|
| 事業名 | CODE スタッフへの奨学金制度の継続について |
| 実施日時 | 随時 |
| 実施場所 | |
| 受益対象者の範囲及び予定人数 | 直接裨益するものは若干名 |
| 実施内容 | 本奨学金制度は、4 年目に入る。1 年目の該当者は齊藤容子であるが、当人が留学する直前に開いた歓送会終了後、その時集まった資金 53 万円を全額本人に奨学金として手渡す。以後該当者の提案がなかったため実施して来なかった。なお初年度の齊藤容子が適宜返済しており、そのため一端ゼロになった基金も貯蓄できるようになった。(基金積立金として処理) |